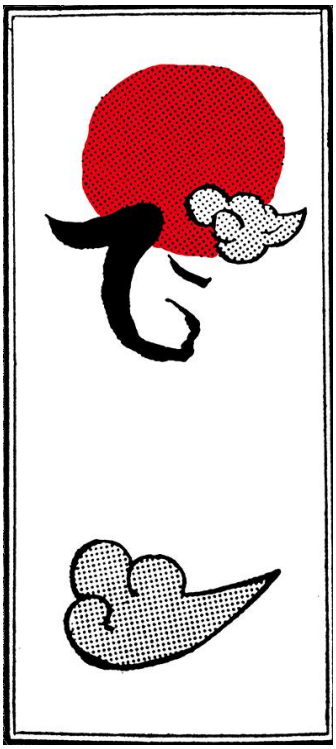

第49号
月1回発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所:愛媛県西条市
上市甲720-1
TEL:080-2986-0856

領綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

古事記

宇宙の創始
―実在―（四）

神秘的方法（ロ）
特にプロティノスについて

竹葉　秀雄

プロティノスに於ては一者は個体を離れて存するのでなく、却て個体に内在して個体の本質的活動に統一の原理を与える根源であったのであるが、而も個体は個体たることを失いて一者の本源に還る時真の個体となり、一者は個体の独立対立を媒介として始めて自己を実現する、という如き積極的意義が個体に与えられては居ないのである。

その結果個体は一者の本源的統一の低減せられた消極的不完全の存在として一者から流出した如き趣を呈するに至る。所謂「流出説（発出論）」Emanationslenre としてプロティノスを解する解釈が出るのも其為めであって、縦令其解釈が不十分なるものなりとするも、一と多との対立を媒介すべき論理の欠如は斯かる傾向を誘致すること否定出来ないであろう。と論ずる。然し、「流出説」はその名の示すが如く、子は母から生まれ、多は一から発出するのであって、その根元が個にあらずして絶対なる一者にあることは否定出来ないのである。唯個を直ちに一者に参入することを止めて個の価値を発揮して絶対者自身を実現する方向に進むものである。

一般に神秘主義は外、客観に向う眼を閉ずることを要求するも、内、主観の奥底に絶対との合一を求むる限り、主観としての個体精神に神の内在すること認めざるを得ず、単なる超越神論に対する内在的汎神論の傾向を避け得ざるものである。併し個体の独立なる意味を確立し得ざる限り、神の内在すべき個体が消滅して同時に神は空虚に帰する傾向を思想的には免れない。超越にして内在という「反対の一致」は、唯「不知の知」に委せらるる限り哲学的には無内容に帰さねばならぬ。哲学として論理的組織主義をもつ限り弁証法を要求し乃至事実上之を適用するのである。一般に神秘主義が西洋哲学に於ては実践を離れた観想の一方に傾き、宗教的要求の満足が現実世界の矛盾乖離を払拭した調和統一の立場に求めらるる傾向を多分に有した結果、現実に即する行為に由る飛躍的統一の実現が十分に重んぜられなかった。其結果発出論的に絶対と相対とが連続せしめられ、対立超越が見失われて空虚な内在のみが残る傾向を伴う。唯前に述べたボエーメの神秘主義が（素戔雄尊的なる。実践的なる神、荒ぶる神。すさまじき神）斯かる実践の契機を重んじ、観想的知性ならぬ実践的意志の立場から神秘思想を発展せしめたことは重要なる特例をなす。併し同時にそれが組織せられる場合には自ら弁証法を適用することも隠れなき事実と言ってよい。我々の如く、実践に於て主観客観、相対絶対の対立的統一が必然に実現せられ、選ばれたる少数の人の選ばれたる瞬間にのみ達せられる神秘的直観（プロティノスは六年間に四度忘我に入ったと伝えられる。宗教の祖始の啓示、また神憑なども考えられる）の代りに、何人も体験する道徳的実践の自覚が弁証法的に発展せられたもの即ち哲学であると解するものにとっては、神秘的方法は哲学の方法として弁証法にま

で具体化せられなければならぬと結論するのが当然であると、田辺氏は神秘的神秘的方法を結んでいる。

建速素戔雄尊が、父神から命ぜられた海原を治められないで、個々に於て調和を破って、高天原に姉の天照大御神をたずね、神に対する誓約によってその清明心が証せられ、勝さびの勢によって乱暴を行われ、天照大御神の岩門隠れによって世は暗闇となり、八百万の神々の議会政治と思兼神の哲人政治と神に占っての神政政治（ここにも弁証法を観る）によって、祭事が行われ再び天照大御神の出現となり（ここにも弁証法を観る、始めの天照大御神の平和が正、素戔雄尊の荒ぶる闇が反、再びより偉大なる神君民和楽の高天原が合）、更に根の国に追放せられた素戔雄尊の実践努力によって国土開発が行われ大国主尊に継承され、建雷鎚神との媒介により、大国主尊は天孫と同じ程度の御殿によって陰の政治を、天孫は天降りまして高天原を地上に成すための知しめす陽の政治を行い給うにいたる。ここに大いなる弁証法を観る。高天原に対して根の国、天照大神に対して素戔雄尊、そして中津国に於ける「日継の皇孫」の道、日本こそ弁証法を行じている国であるが、それは漸次、この田辺元氏の「哲学通論」を読み進むに従って明かにしたい。

農士道

第五章　農士論

～第二節　帰農的安立～

菅原　兵治

帰農

真に農士の道を行ぜんと欲せば、真に帰農せねばならぬ。一体「帰農」の語に対して世間一般の解釈が余り浅薄に過ぎると思う。明治維新の際は失業武士の転向を意味して「帰農」の語が用いられ、最近は都市失業者の最後の逃げ場所として農村に帰ることの意に解され、従って此の語には何等燃えるような誇りも感激もない。私はこの帰農の語をもつと深い精神的の感激に燃える内容を有つ語にしたいと思う。即ち「帰農」とは、農に帰依する――南無帰依農の意味に解釈したいと思う。仏家では南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧と唱えるが、真の帰農は此の意味に於て「南無帰依農」でなければならぬ。然らざれば、恰度曽我五郎の鞍馬寺に於ける生活の如く、身には法衣を纏い、口には念仏を唱うるも、心は常に父の仇討ちの武にあった為に、遂に仏道に帰するを得なかったと同様に、仮令身は農の姿をしていても、心の農に在らざるの輩は、決して之を「帰農」などというには当らぬ。かくて現に農に従いつつ其の実未だ「帰農」し居らぬ者も、亦決して少くはないことと思う。

魂がかかる状態では、如何に作物栽培の技術に長けても、農家経営の手腕に秀でても、亦農村治教の学を修めても、決して農道的生活の上に安心は得られまい。私共は先ず須らく農道生活に帰依し、安立する処がなければならぬ。かくて私は茲に農道的安立の事について述べることとする。

農道的安立

「日出でて耕し、日入りて息う。井を鑿って飲み、田を耕して食う。帝力我に於て何ぞあらん。」

（註）「帝力我に於て何ぞあらん」とは決して帝力の否定ではない。洋々たる江中の魚が敢えて其の水を意識せざると同様、帝力の無限の王化の中に愉楽する民の太平謳歌の声である。帝力がともすれば苛斂と誅求とに堕して民を苦しむることの多い支那の国情に於て特に然りとするであろう。

これは誰もが知る如く、堯帝が微服して農民の状態を視察せし時に、田園の間に老翁が鼓腹撃壌しつつ謠っていたという歌である。従来多くの人々は之を見て、例の東洋の愚民政策の結果として嗤うものすら少くない。然し深慮すれば是れ実に真の帰農的安立の生活を歌ったものと見得て限り無き敬懐の心に打たれる。かように心静かに「農」の上に安立して鼓腹撃壌しつつある裏に、実は位育の功も参賛の功もおのずからに成っているのであって、此の生活こそ実に已に述べた如き帰農的態度と謂うべきものであろう。

世は往々にして、其のものに依って安心出来るなら帰しようという者がある。然しそれでは車の後に馬を繋ぐ様なもので何時まで経っても彼岸に到達し得るものではあるまい。馬を先頭に立てて走って見なければ車は附いて来ぬと同様に、先ず帰依三昧に入るに非ざれば決して安心の車が其後に着いて来るものではない。此の意味に於て「帰依」即「安心」である。或る事に真に帰依しているということは、其事自身安心であらねばならぬ。かくて「日出でて耕し、日入りて息う。井を鑿って飲み、田を耕して食う。……」という心境の立命安楽の生活こそ実に農道的帰依の生活であろう。その真箇農道に対する帰依あってこそ、――換言すれば真の帰農的生活に入ってこそ、右の如き農道的安心が得られるのである。この点について二宮尊徳の人生観は誠に敬仰に値するものがある。

「翁曰く、親の子に於ける、農の田畑に於ける、我が道に同じ。親の子を育つる、無頼となると雖も養育料を如何せん。農の田畑を作る。凶作なれば肥代も仕付料も皆損なり。夫れ此道を行わんと欲する者は此理を学ぶべし。吾始めて小田原より下野の物井の陣屋に到る。己が家を潰して四千石の復興一途に身を委ねたり。是れ則ちこの理に基けるもの也。……余の歌に『かりの身を元のあるじに貸し渡し、民安かれと願うこの身ぞ』曰々」と。この身の一切を元のあるじに貸し渡して己が志に精進してこそ、始めて帰依も安立も生ずるであろう。而して是れ実に士的生活の第一義である。農に志す者、苟くもこの境地まで腹を据えてかかるでなければ農士の安立は味い得ないであろう。此の真に農に立志し、真に農に帰依し安立することを忘れて唯徒らに経営の損得と、生産技術の巧拙とのみに熱中した所で、決して農民は根本的なる安心と喜悦とを得らるるものではない。

日本自治集団第一回会合

三浦　夏南

令和四年四月三日、熊野のむすびの里にて日本自治集団の第一回会合が開かれました。現在自治集団に加盟している団体は四十団体ですが、今回は二十四団体が集まりました。私もひの心を継ぐ会の代表として出席致しました。会合の内容としては、諸団体の自己紹介が中心となり、残った時間でこれから自治集団としてどのような取り組みをしていくかを話しました。様々な業界から自治集団に参加されていましたが、印象としては会社としての参加が多かったように思います。ひの心を継ぐ会は、安岡先生の農士学校、竹葉秀雄先生の三間村塾の志を継承し、それをさらに現代的に発展させ、自治へと繋げていきたいとの旨を話しました。

これから何をしていくかの討議に入ってからは、私が第一に挙手し、資本主義経済によるマネーの拘束から自立するために、先ずは自治集団による経済ブロックの形成に尽力すべきであると提言しました。とりわけ国家生活の根幹であり、我が国の伝統文化の根源でもある農業が資本主義社会下に於いては大変厳しい状況にあり、真実の農業を取り戻し、自治の基礎単位である共同体を再生するには、資本主義社会内での経済的独立が急務であると主張致しました。

参加者の中にはコメの流通に携わっている方が居られ、農が資本主義の流通の中では原理的に厳しい状況にあり、本来は国が公務員として雇用すべきであるとの主張もあり、多くの方が先ず第一に経済ブロックの形成を行わなければならないという問題意識を持たれていたようで、次回の会合では具体的に如何なる方法によって、経済的自立を果たすのかの議論を行うことになりました。

農によって生活をしながら祭祀を行い、祖孫一体となって家族が農の現場で協働し結ばれて、一族、共同体へと家を発展させることが、新たな世界を担う人々を生み育てて行く上での急務ですが、資本主義社会の構造的問題から、若い人々を帰農させて教育することが大変難しい状況にあります。いくら良い志を持っていても、お金もなく、機械もなく、家もなく、家族の人数の少ない若い人たちが帰農するには巨大なハードルが立ちふさがっています。ここを解決するには、自治の志を持った人々の連帯による経済ブロック形成がどうしても必要です。次の会合でも、農の現場に於いて竹葉先生の三間村塾の大志を抱きつつ、日々悪戦苦闘している経験を以て、若い人間らしく鋭く忌憚のない意見をぶつけて行きたいと思います。

次回の会合は五月二十一日大阪です。来月の月報でも簡単に報告させていただきます。

とよくも農園だより

三浦 美恵

だんだんと暖かくなり、農作業をしていると、日中は汗をかく日も増えてきました。作物にとってもビニール内は高温になるため、ネギにかけていたトンネルと、アスパラガスの内ハウスを巻いて片づけを行いました。特にネギのビニールトンネルは今年が初めてだったので、長いビニールをどのように片づけるのが良いか、試行錯誤しました。初めての事は何事も時間のかかるもので、途中でビニールが風に煽られて巻きづらくなったり、巻き取りの芯が外れてしまったりと苦戦しましたが、段々と要領を掴み、最後は主人・義弟・私の三人で上手く役割分担をして手際よく片づけをすることができました。

アスパラガスは、近隣のアスパラガス農家の方に教わった通り、昨年よりも追肥の頻度と量を増やし、その年の最も重要な親株となるアスパラガスを育てている所です。虫や病気が出ていないかを日々の収穫中に観察し、昨年よりも質・量ともに良いアスパラガスを育てたいです。

昨月定植していた里芋は、徐々に芽を出し始めています。暖かくなると同時に次々と芽を出す里芋は頻繁に様子を見に行き、昨年同様立派な里芋を収穫しようと意気

込んでいます。

また今月はたびたび家族会議を行い、家族内の序列について整理をしました。家長を中心としてその正統血統者である長男を重んじること、以前から目上の人には敬語で接していたものを、今後はさらに年下であっても目上の人には指導をしないなど、上下の別をより厳格化しました。さらに、以前から異端邪説が入り込みやすいテレビ・洋楽は撤廃をしていましたが、「疲れた」等のネガティブな言葉は、「充実感があった」などの明るい言葉に言い換えることにしました。加えて服装も正していくべく、参拝時の着物、農作業着、日常着、寝間着の和服への移行を話し合いました。経済的な問題や機能性の問題もあり、一度に全てを変えていくのは難しいですが、インターネットで調べたり、着物屋さんや祖母に相談したりして、徐々に移行していく予定です。今後は礼儀を重んじて、食事や参拝、立ち居振る舞いも正していこうと計画しています。

最初は大人四人から始まった三浦家でしたが、今では子供と大人の数が同じ八人にまで増えました。日々の学問だけではなく、日常生活全般を整えていくことで、八人全員の身が修まってきているのを感じます。『大学』にある「至善に止まる」とは、ある程度良い状態であり続けるのではなく、現状に満足せずに常に完全であろうと努めることだそうです。形を正して、常によりよい「とよくも農園」であるべく、今日も謹んで自分の責務を全うしたいと思います。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円